清涼殿南庇「殿上の間」(「侍所」)に関する研究

－平安宮内裏の空間構成と儀式に関する歴史的研究 3－

A STUDY ON THE MINAMI-HISASHI OF SEIRYODEN「TENJO-NO-MA」
(「SABURAIKOKORO」)

－ A historical study on spatial configuration and ceremonies in Heian-kyu Palace 3－

満田 さおり *

Saori MITSUDA

This study aims at revealing the name, directions and its changes of the *Tenjo-no-ma*. The results show mainly the following points.

1. It's recognized that *Tenjo-no-ma* is the space where respected to the user's status and the rule of the *Tenjo-no-ma*'s spatial order; the establishment of manners and directions are also the characteristics of the *Tenjo-no-ma*.
2. During the Emperor *Uda* and *Murakami*'s era, the Emperor sometimes appeared on the *Tenjo-no-ma* with *tenjobito*. The Emperor *Enyu* hadn't appeared on the *Tenjo-no-ma*, and the *Tenjo-no-ma*'s directions had been changed in this period.
3. Since the Emperor *Uda*'s era, the waiting place in Imperial Palace for *tenjobito*, which was called *Saburaidokoro* by the Emperor, and *Saburaidokoro*, *Saburai*, *Tenjo-no-saburai* and *Tenjo* by the senior officers, assumed to follow the name process as *Saburai*, *Saburaidokoro* → *Tenjo-no-saburai* → *Tenjo* → *Tenjo-no-ma*.

Keywords : Heian-kyu Palace, Seiryoden, minami-hisashi, tenjo-no-ma, saburaidokoro, tenjo-no-goishi

平安宮内裏, 清涼殿, 南庇, 殿上の間, 侍所, 殿上御椅子

はじめに.

内裏清涼殿の南庇、通称「殿上の間」は、京都御所(安政年間造営)に現存していることもあり、内裏において最も著名な空間の一つといえるだろう。「殿上の間」に関しては、政治制度史の立場から古瀬奈津子氏によって「昇殿制の展開」と「殿上の間」の関係に注目した論考が発表されている^{注1)}ほか、建築史学の島田武彦氏が近世復古清涼殿の「殿上の間」のしつらいについて明らかにされている^{注2)}が、「殿上の間」の成立過程や使用形態に関する緻密な考証は、これまでなされてこなかった。その点、「殿上の間」の成立期である平安時代中期の記録、および平安中期以降の儀式書を丁寧に読み解くと、「殿上の間」が、蔵人所の管轄下にあり殿上人の控所として規律を重んじる場であったこと、天皇と殿上人の結びつきを確認する場となっていたこと、段差・建築装置・調度等で秩序立てられた空間であり、その空間秩序は儀式の際にも効果的に利用されていたことなどを理解することができる。また、「殿上の間」の呼称や使用実態は、成立当初から一貫したものではなく、「殿上の間」の使用法や作法等をある程度まとめたかたちで詳説した『侍中群要』^{注3)}の内容と、それ以前の「殿上の間」の在り方には相違もある。そこで、本論は、「殿上の間」の呼称・使用法とその変遷について明らかにし、「殿上の間」に与えられた性格(機能)の変化を読み解く糸口を掴むことを目的とする。なお、本論が依拠するのは、前出の『侍中群要』と、「殿上の間」の萌芽期である宇多天皇から『侍中群要』にまもってそ

の記録が記されはじめる円融天皇までの六代にわたる記録史料^{注4)}、平安時代中期以降の儀式書^{注5)}とする。

研究方法は、以下の通りである。①.『侍中群要』の「殿上の間」に関する記述を整理し、「殿上の間」の使用法を明らかにする。②.平安時代の記録史料および儀式書の「殿上の間」(「侍所」)に関する記述を整理し、「殿上の間」の呼称および建築の形態や調度に注目して、「殿上の間」の特徴とその変遷を明らかにする。

一.『侍中群要』にみる「殿上の間」の特徴(図1)

『侍中群要』(以下『侍中』)は、殿上の雑事を総括していた蔵人所の職務に関する書(編者不詳)である。成立期について、書中下限は延久三年(一〇七一)であるが、本書冒頭に「一、蔵人式云、寛平二年 左大弁橋廣奉 勅作之」とあるなど、記事内容から成立期を類推するには問題が多く未だ定説を得るに至っていない。ただし、『侍中』の校訂を行った目崎徳衛氏が、記事が集中する円融朝から後一条・後朱雀朝頃を編纂期として特定された^{注6)}ことなどから考えても、『侍中』は、平安時代中・後期(特に十世紀末期の円融朝以降)の蔵人やその職務の在り方を伝えているとみて問題ないだろう。したがって、宇多から村上朝の「殿上の間」成立期に、『侍中』の記述をそのまま当てはめることはできないが、後述する記録史料と比較することで、「殿上の間」の変遷を明らかにしたい。

* 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Kyoto Univ.

図1 平安宮内裏清涼殿平面図

――「殿上の間」の呼称と鋪設

まず、『侍中』における「殿上の間」の呼称について確認すると、「殿上」が最も多く、「侍」が三例、「殿上侍」「殿上之間」が各一例みられた。したがって、『侍中』編纂時には、「殿上の間」は「殿上」と記されていたことがわかる(「侍」等の呼称については後述)。次に、『侍中』にみる「殿上の間」の建築装置等について確認する。『侍中』の記述によると、「殿上の間」は以下のものを有していた。記載順に「立部」「履脱」「小壁」「簡」「壁」「殿上口」「殿上東戸」「小薙」「殿上御椅子」「小板敷」「長押」「棹」「殿上大盤」「殿上西戸」「小大盤」「殿上弓」「殿上畳」「殿上西小戸」「殿上書杖(文刺)」「日記辛櫃」「殿上琴」である。図1は裏松固禪『大内裏図考證』(以下『考證』)をもとに作成した、平安宮内裏清涼殿の平面図^{注7}である。『侍中』の鋪設に関する内容と、『考證』をもとにした復原図はおおむね齟齬がない。

殿上の鋪設で特に特徴的であるのは、殿上御椅子・台盤・小薙の取り扱いである。殿上御椅子は「殿上の間」に常設され、蔵人の日課として朝には「上小薙、次取御座覆(殿上御椅子)。小板敷乃西乃妻乃長押上=有棹=懸之」、夕には「下小薙、覆御座覆(近來御寝後覆)」として、夜は

覆いを被せ、日中は覆いを取り払った。その際、必ず御椅子東側の小薙の上げ下ろしを一緒に行った。なお、天皇の物忌の際には覆いを取らず、小薙も上げなかった。また、台盤は「亥二刻之後(御寝之後)、取却大盤。早旦又可立(主殿司・小舎人等役也)」として、天皇の就寝後に一旦片付け、翌日早朝にまた立てることになっていた。台盤を囲む座次は官位によって規定されており、殿上御椅子に近い東側の「小大盤」に親王・大臣が着座し、その西側の「大盤」に大納言以下が着座する^{注8}(以上、畳に着座)。「殿上の間」は、天皇の状態(就寝・物忌)によって調度を替えることで、天皇主体の空間であることを示すとともに、殿上御椅子は、官位にしたがって着座する殿上人に、天皇との限定的な主従関係を強く意識させる装置、すなわち天皇の象徴として機能していたといえるのではないだろうか^{注9}。『侍中』「敷砂事」の項には、儀式などの際に、紫宸殿・清涼殿の庭に加えて、「殿上」前にも砂を敷くことと記述されている^{注10}。天皇が出御する庭に砂を敷くとして、儀式の際に「殿上の間」の前にも砂を敷き整えることは、殿上御椅子を設置した「殿上の間」も「御前」と認識されていたことを示すものと考えられる。

一一二．「殿上の間」における作法

「殿上の間」では、昇降殿の仕方・出入口・着座位置・振る舞い方などについて官位(ないし職務)による規定があった。まず注目したいのが、蔵人初参の際の作法で、「宣旨下後、小舎人来告、即参入。於腋陣令蔵人奏(立橋西)。蔵人帰来(立橋上向御所、向背於令奏人也)、仰聞食由。微音称唯(近代不称)、拝舞(…)。…舞蹈欲畢之間[近代仰聞食之由帰入敷]、奏者帰入、於立部辺相待、随其後入。於履脱ゝ履、居小壁下(東面、古書云北面)。蔵人開簡著之(封後事也)。頃之居湯漬、随先達気色食之、了置箸、帰著小壁下。入夜之後、臨深更随上臈命下直廬[近代御寝之後退下]。脱装束著宿衣、逐電昇殿(宿所合宿可然先達宿所。近代不脱袍)[候小壁辺]。早旦日給之後、下宿所著装束、早速還昇。頃之退出(三日之間不触障。只触気色於得意先達還)。又上臈自進示其由耳。」とあり、新任蔵人は、宣旨を受けて拝舞舞蹈した後、「殿上の間」南西の立部辺から蔵人の後について入り、履脱で履物を脱ぎ昇殿し、小壁下(「殿上の間」西北)に居し、日給簡を付けた後、「湯漬」を食す。その後宿直し、翌日早旦に日給の運びとなる。つまり、天皇と新任蔵人の直接的な主従関係が「殿上の間」において結ばれる。

そのほか、蔵人が殿上に着している間に、天皇や大臣が来れば、座を起つこと、小板敷に着している間に、上卿・貫首等が来れば、早く地に下りること、蔵人が着座している間に、上卿・貫首が地において命令すれば、早く座を下りて答申すべきこと、殿上奥座は往反すべきでないこと、蔵人や殿上人は右青瑣門を通らず殿上東戸を往反すべきこと但し官奏を行う際大臣は右青瑣門を通ること、物忌に参籠する人は殿上口の立部辺で知らせ日給を給うこと、忌月には殿上の琴を御蔵に納め、殿上において歌遊を慎むことなど、「殿上の間」における細則について明文化されている。また、内裏からの勅使は、東宮の侍臣でなくても東宮の「殿上」に昇ることができるが、院の「殿上」には昇れなかった。一方、院の御使は「内殿上」(「殿上の間」)に昇れたという^{注11)}。

それらの作法からは、「殿上の間」が明確な空間秩序を有し、使用にあたり身分秩序が重視された空間であったことがうかがえる。ただし、「可隨時定並形勢」や「可随便宜」などの添え書きが規定文の後に記述される場合もあり、「殿上の間」における作法は鉄則ではなく、代替わりやその時々々の定により、変化し得るものであったことも留意すべき点である。

一一三．『侍中群要』にみる「殿上の間」の使用法

『侍中』の記載内容を整理すると、「殿上の間」は、大臣・納言への宣旨^{注12)}、蔵人所雑色以下の定、臨時御読経の行事、告文授与、御修善の際の宿侍、天皇行幸時の上卿の食事、大宰帥・大式赴任の際の酒肴の場として使用されている。「殿上東戸」は賜祿の場、および御前に進み出る際の入口として使用される。また、親王元服儀において加冠役を賜祿のために清涼殿上に召す際に、内侍の立ち位置として「殿上東戸下」の空間が使用されている^{注13)}。「殿上前」と表現される「殿上の間」南側の地下の空間は、楽所生等の試事、「疎悪」なものを益供した御厨子所衆に対する勘責の場、および清涼殿上への参入経路として使用された。

その他、『侍中』に直接的な記述はみられないものの、一一二．で述べたように、忌月には殿上の琴を御蔵に収納し、殿上の歌遊を慎むと規定されていることから、「殿上の間」において常設の琴を使用する歌遊が行われていたことがうかがえる。

二．記録史料上の「殿上の間」に関する記事と儀式(表1)

本章では、「殿上の間」(「侍所」)成立期の宇多天皇から円融天皇期における同所の使用記録と呼称の変遷についてみていく。

二一．「殿上の間」の呼称

表1は、宇多から円融期までの「侍」・「殿上」を含む記事を整理したものである。冷泉天皇を除くすべての代に「殿上侍」という場がみえ、「侍」については、御記(天皇の日記)をはじめとして「侍所」と記される場合が多い。宇多期の「うへのさふらひ」[表1-①]が清涼殿南庇であるかは今のところ不明であるが、延喜十年(九一〇)正月二十三日の「醍醐天皇御記」[表-④]で、天皇が内宴後清涼殿に還御した後に侍所に出御して奏歌している点、延喜十六年十一月二十七日の同記[表-⑥]で、親王元服の際に御前(清涼殿東庇出御)に参上する前の親王の控所となっている点、延長七年(九二九)二月十六日の「吏部王記」[表-⑩]に、「侍所倚子」と記される点など『侍中』との共通性から、醍醐期には、「侍所」が清涼殿南庇に存在していたと考えられる^{注14)}。「村上天皇御記」にも「侍所」が多く登場し、清涼殿南庇は、天皇によって「侍所」と称される空間であった。当時の撰関や公卿の記録には、同所は「侍所」「殿上侍」「侍」と記されている。表1をふまえると、呼称の変遷について、「侍」「侍所」→「殿上侍」→「殿上」→「殿上の間」という流れが想定できるが、「殿上」が固有名称としてだけでなく、複数の語意を有する言葉であるので考慮を要する。すなわち、「殿上」は、古くから「天皇の御す殿舎上」を示す言葉であることが指摘されており^{注15)}、また地下(床下)に対する言葉として用いられる場合もある。したがって、清涼殿南庇を「殿上」と呼び始めた時期の特定は困難であるが、「殿上の間」の鋪設に注目すると、呼称の変遷に関して興味深いことが明らかになる。表1の下線部は、一一一．で確認した「殿上の間」のしつらい(「倚子」「琴」「戸」「簡」「畳」等)である。それらに注目すると、天曆二年(九四八)四月九日の新造清涼殿遷御の前後で呼称が変化していることがわかる。遷御前には、調度品の前に「侍所」「殿上侍」「侍」と付くのに対し、遷御後は「殿上」と付く。円融期の「親信卿記」は、当時蔵人をつとめた平親信の日記であるが、その天禄三年(九七二)七月七日の記録[表-⑥]に「儀式装束如蔵人式。天徳二年記云、…、移立殿上御倚子」と記すのをはじめとして、「殿上畳」「殿上倚子東戸」「殿上文夾」など、「殿上の間」の調度品の前には「殿上」と記す。以下はあくまで推測の域にすぎないが、呼称の変化の画期は、天曆二年の内裏清涼殿の新造、および天曆年間(九四七―九五七)撰述の「蔵人式」(「天曆蔵人式」)^{注16)}の記述にあるのではないかと考えられる。第一に、新造内裏清涼殿が、以前のものから変化し、それが「殿上の間」の呼称と連動していることも考えられる。ただし、現時点でそのことを証明する手立てはない。第二に、前述の「親信卿記」天禄三年の儀式の鋪設に関する記述は、「蔵人式」式文に準拠している可能性が高く^{注17)}、「蔵人式」で特に「殿上の間」の調度品に「殿上」という言葉を付けて固有名称として記述されたことが契機となり、その後の清涼殿南庇の呼称に影響を与えたということも考え得る。ただし、「親信卿記」では、それらが置かれている「場」については、「侍」「侍所」「殿上侍」「殿上」と記し呼称に一貫性がなく、「侍」と「殿上」の併用は円融期においてもみられるのである。

儀式書における清涼殿南庇の表記方法を確認すると、『西宮記』には基本的に「侍所」と表記される。ただし、「侍所」だけではなく、

表 1 「侍」・「殿上」に関する記録

	記事年月日	史料	儀式	本文(必要箇所を抜粋)
宇多	①寛平年中(889-898)	古今和歌集	(御遊)	おなし御時、 うへのさふらひ にて、をのこともにおほみき給ひて、おほみあそひ有ける…
	②寛平9(897).7.3	寛平御遺誡	(讓位関連)	宣旨滋野等者、日々出居 女房之侍所 、行藏人等日給之事。
	③延喜9(909).2.21	醍醐天皇御記	皇太子朝覲	皇太子始朝覲。…、禮了還。更召 侍所 (此座平敷)。…、東宮傳、学士、坊官、進以上乳母等祿有差 (傳左[右]大臣於御前給之。大夫以下於 侍所 給之。乳母於北方給之)。 依承和故事、令奏弦歌。帥親王聽佩劍。親王下殿拝舞云々。還清涼殿、更出 侍所 奏歌。 廿一日竟夜、御導師景鈴、誦錫杖之間、調琴及和琴。…僧退出下之後、天皇出 侍所 、有盃酒管弦事。次給祿有差。 此日克明親王加元服。又慶子内親王著裳。皆年十四歳。其儀、今朝藏人装束清涼殿。… 午刻、克明親王上 侍所 。令侍臣召之。親王參入、進坐御座。 故左大臣息敦忠、參入御息所許。令召 侍所 、即聽昇殿。 太子經 侍所 前參上(有酒膳禮)。太子還宮之後、公卿侍殿上飲酒。 此日代明親王加元服(親王年十六)。…(並如克明親王時座)。未三刻、代明親王參上侍 侍所 令召之。親王進侍座。…訖親王退出、於射場改衣服。 未刻、小舍人敦忠加元服。即仰令授從五位下。參入 侍所 。令右近少將伊衡唱叙之、伊衡進跪御前階、展紙叙之。 皇太子參上(自 侍方 參上。其座御座南間、北面。用茵一枚)。 右大將藤原朝臣、令奏告文。御覽之後、藤原朝臣、於 殿上侍 、召使静責之。 天皇御 殿上侍 (御倚子云々)、覽舞人等。渡 殿上 前、自階下退。 ※「御倚子」初見 …藏人俊執懸物出、從 侍 結付射堂東南柱。女裝束一襲懸木枝。 於 女房侍 、命九月盡密宴。撤中度殿隔、設華燭於菊花間及欄頭。…、召源脩於壺中奏琵琶。当代源氏二人元服。…、次冠者二人立座退下、於 侍所 改衣裝。…、次冠者二人入仙華門、於庭中拝舞退出。參仁和寺帰参。先是宸儀御 侍所 倚子、親王・左右大臣以下近臣等同候。有盃酒御遊。兩源氏候此座(候四位[品]親王之次、依仰也。奥方壁下也)。深更大臣以下給祿。
	④延喜10.1.23	醍醐天皇御記	内宴後御遊	
	⑤延喜13.12.21	政事要略	御仏名	
	⑥延喜16.11.27	醍醐天皇御記	親王元服	
	⑦延喜17.2.15	醍醐天皇御記	(昇殿承認)	
	⑧延喜18.5.17	西宮記	東宮入觀	
	⑨延喜19.2.6	醍醐天皇御記	親王元服	
	⑩延喜21.1.25	醍醐天皇御記	元服後叙位	
	⑪延喜22.11.21	北山抄	賀茂臨時祭	
	⑫延長元(923).9.26	西宮記[裏書]	香椎廟奉幣	
	⑬延長3.9.13	西宮記	臨時奉幣	
	⑭延長4.3.6	吏部王記	殿上賭弓	
	⑮延長4.9.29	醍醐天皇御記	九月盡密宴	
	⑯延長7.2.16	吏部王記	親王元服	
	延長8.6.26	扶桑略記[裏]	清涼殿落雷	登殿之上、舍人等俱於清涼殿逢霹靂。…、又雷火着清涼殿南簷。 天皇避清涼殿、移坐常寧殿。依去月雷震之事也。 子二刻、遷御常寧殿(壞清涼殿、以新材起構之間、御此殿)。
	延長8.7.2	日本紀略 西宮記[裏書]		
	⑰延長8.8.29	吏部王記		一世源氏等祇候、疑無位間、応服宿直否。又疑 殿上侍 座次(源氏日被聽昇殿)。…、又座次理応加六位上、雖然就五位上四位下、得適敷。抑須問先例。 左大臣令右少弁公忠奏云、 殿上侍 時節自寛平御時被伝。今可用彼渡。將可候東宮時所造乎。…、上(醍醐)日、時節代々相伝、用彼可宜、抑随便行了。又螺鈿大床子是累代物、須奉之。
	⑱延長8.9.22	吏部王記	讓位	
朱	⑲延長8.9.26	吏部王記		上(醍醐)召在衡詔曰、今日今上(朱雀)可渡御云々。未四点今上觀謁。…、爰今上參麗景殿、…、此時女藏人候麗景殿 侍所 、近衛中少將候常寧殿南廊。 今上即位。…、事了還宮。左大臣(忠平)於 殿上侍 、召王卿賜飲。
	⑳延長8.11.22	吏部王記	即位	
	承平元(931).11.7	吏部王記 江談抄	清涼殿改造	始壞清涼殿。南一間、因去年雷電改造也。其東行南廊及厲校書殿廊同改造云々。 故老伝云、延長末、移立清涼殿於醍醐寺、更又改作、如本種竹云々。
	㉑天慶3(940).10.1	吏部王記		午刻參入、初就 殿上侍 。是日不御南殿、於宜陽殿給侍從以上饗。
	㉒天慶5.11.9	吏部王記	賀茂臨時祭	賀茂臨時(祭脱)、戊四刻使等從社還。余與右大將共勸坏、即依召候御前。餘卿随進坏、同召令候。 給酒肴如常。…、庭火試畢、以右近將監平安直為本方琴取(即用 殿上侍 筥也)。 上御南殿。即就外弁。但上野親王始可候会、仍暫就 殿上侍 云々。群臣座定、上詔内弁令召上野親王。 …、先例不候列者、内弁奏召之。而親王候禁中、仍無便。内弁常辞。仍有詔召之。
	㉓天慶6.1.16	吏部王記	踏歌節会	灌仏云々。了藏人來宜陽殿召王卿。…參上、昇殿人自 侍戸 進、其餘入自青瑣門、執施物置案就座。 導師經長橋・公卿後就座、從僧從殿昇云々。
	㉔天慶7.4.8	吏部王記	灌仏	
雀	㉕天慶9.9.10	吏部王記		詔裂藏人右衛門尉中原助信宿直衣云々。昨夕主上(村上)御 殿上侍 、披見助信所隨身之裏中衣、紅色頗深、仍所破。或云、宿衣私物、非人主可開看。頗涉苛酷云々。
	天曆2(948).4.9	日本紀略	新清涼殿遷御	天皇還御新造清涼殿。
	㉖天曆3.4.12	西宮記	藤花宴	於飛香舍有藤花宴。以 殿上 御倚子立南庇(有徳代)。
	㉗天曆4.7.23	九曆逸(御産)	立太子	依重服忌此日不可參入。而依伊尹伝仰參入、不更經陣座、着 殿上侍 。召御前被定仰坊官。…、左兵衛官人座於東對東板屋南庇(本家 侍所)。…主上御座在清涼殿東孫庇南第三間、錦毬代・平文倚子。王卿座在東實子敷南一二間、
	㉘天曆7.10.28	九條殿記	殿上菊合	西面北上(以讃岐円座敷之)。…、其後式部卿親王以下、間供御酒、奏両三曲間、有仰召 殿上琵琶 ・琴等。 參内。暫著陣座、即參東宮(憲平)梅壺。申刻經藤壺並後涼殿東廂等參上給。 抱奉兼家自 侍 北壁辺進給。此間王公不動座、是若理敷。東宮御拝礼畢、暫著給 侍座 。供円座。其後小朝拝。 下孫庇御簾。同庇南第三間鋪錦毬代(用藏人所)、移立 殿上御倚子 。南階南實子敷移敷 殿上 畳、為侍臣座。 其儀垂東庇御簾、當孫庇南階儲御座(立 殿上 倚子毬代)。 召内教坊妓女十人令奏絲竹。其儀、中渡殿御簾中、數置六枚為座。 女房侍 前小縁數置、為唱歌侍臣座。 有女房歌合事。…女房又相分候清涼殿西庇簾中第五間、立倚子(便用 女房侍 倚子。此間上簾)。申刻就倚子。…右方入自北方、献和歌洲濱(…更衣之童女四人昇之、進御前渡波、算洲洲濱置小庭算刺小舍人円座之前)。暫左方 経侍所 自南方献和歌洲濱(…又置南小庭小舍人円座前)。 其儀、西庇皆懸新御簾(納仁寿殿御宿也)、第五間(渡殿間也)、立御倚子(大盤所御倚子)、…頃之左方從 殿上侍 方參上。
	㉙天徳元(957).1.1	九曆抄	童親王拝觀 小朝拝	
	㉚天徳2.7.7	親信卿記	乞巧奠	
	㉛天徳3.8.16	西宮記	詩合	
	㉜天徳3.10.19	村上天皇御記	内教坊舞	
	㉝天徳4.3.30	村上天皇御記	女房歌合	
		殿上日記		
	天徳4.9.23	日本紀略	内裏焼亡	今夜亥三次、内裏焼亡、…天皇先御中院、次御朝所。頃之、御職曹司。
	㉞天徳4.9.28	村上天皇御記	太宰大貳赴任	大貳好古朝臣申赴任之由。即召東庇 侍所 令延光朝臣仰之云々。依旅所不召御前。給祿云々。
	㉟天徳4.11.2	西宮記[裏書]	御曆奏	中務省率陰陽寮、於 女房 前小庭、献明年御曆(昨日廢務、今日奏。又依无内侍所、於此献贄)。
	天徳4.11.4	日本紀略	冷泉院遷御	天皇自職曹司遷御冷泉院。
	天徳5.11.20	日本紀略	新造内裏遷御	今日亥二点、天皇自冷泉院遷御新造内裏。
	㊱応和元(961).1.17	村上天皇御記	(鷹犬御覧)	召陸奥所進鷹犬於 侍所 覧之(助信申之)。…
	㊲応和元.11.25	西宮記	賀茂臨時祭	試楽了、於 殿上侍 有御遊。
	㊳応和2.2.22	村上天皇御記	(給酒)	出 侍所 、令侍臣不改昨服猶候、賜酒奏音楽給疋絹公卿。
	㊴応和3.8.20	村上天皇御記	親王元服	廣平親王加元服。年十四。…申三刻、廣平親王參上候 侍所 。即著大床子。令濟時召親王、親王進著座。…親王到射場殿西便所(□立屏風鋪設榻之)、改元服…、暫奏捺印位記、仰先例於 侍所 給也。
上	㊵応和3.11.25	西宮記[裏書]	賀茂臨時祭	皇太子依召參自 侍所 、候東又庇南第二間(鋪茵一枚、北面)。 令右衛門少志飛鳥部常則堆雪作蓬萊山於 女房 小庭。今日功了。 皇太子參上。著帳中倚子。次太子出自 侍所 、於東又庇拝舞、了退出。 為平親王遊覧北野。子之興也。…、召為平親王、參議伊尹朝臣於前、又召覽陪從殿上侍臣鷹飼等被馬(…)。… 入夜為平親王、右衛門督藤原朝臣朝忠、伊尹朝臣等、還參候 侍所 。即於 侍所 給酒。… 下侍 東第一間施立屏風。其中敷土鋪二枚、茵一枚(並用本家物)、為親王換衣所云々。 申一刻出紫宸殿、云々了還清涼殿。暫出 侍所 、令侍臣及衆所人三四人、奏東遊、神楽。比明賜祿云々。 召使以下給酒饌。王卿等佐酒。左大臣実頼在座、召使兼通朝臣授告文(例於 侍所 若降授之。而於座授之。違例云々)。 今日雨雪、供御菓。未刻、出 侍所 令飲酒王卿侍臣暫入内。…
	㊶応和3.閏12.20	河海抄		
	㊷康保元(964).1.2	村上天皇御記	小朝拝	
	㊸康保元.2.5	村上天皇御記	(給酒)	
	㊹康保2.8.27	村上天皇御記	親王元服	
	㊺康保2.11.14	西宮記[裏書]	豊明節会	
	㊻康保2.11.19	西宮記[裏書]	賀茂臨時祭	
	㊼康保3.1.1	村上天皇御記	(給酒)	

	安和2(968)・9.20 ④⑨天禄3(972)・3.3	日本紀略 親信卿記	清涼殿遷御 御燈・節会	天皇從襲芳舍、遷御清涼殿。
	④天禄3.3.	親信卿記	能登守申赴任	于時宸儀出御。次理兼・余等取御贖物供奉(…随召官人持参、侍小板敷下、侍臣取之、從御倚子東戸□)。※「小板敷」「東戸」初見 先例供御祓時例、着御座官人、侍候侍所。四位・五位及行事、伝取供之云々。而此度乖先例云々。 召出納、令置祿物於侍小板敷。…仲甫朝臣、經侍前候仙華門内。…旧説云、殿上受領者、令奏罷申、召御前儀。…拝舞、了出自仙華門、 經弓場来侍前云々。 次導師意妙率弟子僧、經侍前、入自仙華門、自長橋参上、着座。 儀式装束如藏人式。天徳二年記云、…下孫庇御廳、同庇南第三間鋪錦徳代(用藏人所)、移立殿上御倚子。 南階〔間脱〕南簀子敷、移敷殿上量為侍臣座。 依召参御前、給表奉右大将(便於侍奉之)。…大臣令奏草(於侍召所柳官、入之令奏。可聞先例。但古人云、猶於陣作者可奏此文書、…)。 次大臣参上(出入殿上倚子東戸。但官奏用下戸)。 進奏報。即取奏文夾殿上文夾、待出御奏之。 儲饌於侍所。 今日宣々旨(右近陣)、件等人馬、出自明義門、經侍前並後涼殿北前、如本出去(此例未知先例、若是時議歟)。 藏人頭又召仰藏人所雜色以下並瀧口等、令大索宮中(於破陣下召仰、申返事時、用同所。但件事可尋先例、奉仰及申返事、於下侍前可奉申歟)。 次内藏寮賜僧供(机三脚北面、從侍方居之)。 下侍西鋪量為酒部所。 大臣於殿上召使賜告文(使於円座賜之)。其後召御前給勅命之後、賜御衣一襲。… 宇佐使事／…、時刻出御、同寮奉御贖物、自侍方同伝取供之。 保光・左少弁伊陟、相共度侍前、出從腋陣着八省、分遣使々。史・外記・少納言等、如例経月華門出矣(度侍前例、可尋間)。 候宿、其曉盜人一人来殿上侍、取左少弁(伊陟)・左衛門佐(顕光)衣。 点定了後、少將於侍書付名。 宰相五六人着殿上座、不候御前。同座狹也。 太子帰宮之後、藤氏上卿及侍臣等經侍前、於射場殿、令左右近中將正清朝臣奏慶賀之由。
	⑤②天禄3.10.23 ⑤③天禄3.10.27 ⑤④天禄3.11.27 ⑤⑤天延元(973)・3.6 ⑤⑥天延元。4.14 ⑤⑦天延元。4.25 ⑤⑧天延元。4.29 ⑤⑨天延元。5.17 ⑥①天延元。5.20	親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記	上表勅答 官奏 官奏報 庚申御遊 賀茂祭 宮中大索 贈皇太后国忌 宇佐使餞 宇佐使發遣	内裏有火。…、天皇出自玄輝門、御柱芳坊。依火氣熾、天皇遷御職曹司。 天皇自職曹司、遷御太政大臣堀川第。 天皇自堀川院遷御内裏。 小右記云、…、臂鷹出自侍所候御簾下、御覽了出之。所衆・出納等、率犬入自仙花門、跪御前令覽了、各牽出。其後召犬飼等覽之。 諸殿舍皆悉焼亡。…、天皇移職曹司。 天皇遷御太政官庁。 天皇遷御四条後院。太政大臣四条坊門大宮第也。以之為後院。
	⑥②天延元。5.23 ⑥③天延元。6.9 ⑥④天延2.4.17 ⑥⑤天延2.11.11 ⑥⑥天延2.12.7	親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記 親信卿記	十六社奉幣使發遣 盜人入殿上 賀茂祭覽女騎馬 内親王着裳 東宮初参觀	藏人式部丞藤原貞孝候殿上間、為鬼物被殺(後院)。
融	貞元元(976)・5.11 貞元元。7.26 貞元2.7.29	日本紀略 日本紀略 日本紀略	内裏焼亡 新造内裏遷御	天皇從後院遷御職曹司。 天皇遷御新造内裏。東宮御座昭陽舍。
	⑥⑧天元元。4.25 天元3.11.22 天元3.12.21 天元4.7.7	花鳥餘情 日本紀略 日本紀略 日本紀略	鷹犬御覽 内裏焼亡 四条後院遷御	召左大臣於御前、被定中宮職司。…、其後参射殿辺奏清書。…、下官即改注名所於殿上簡。大夫・下官参中宮。 内裏焼亡。…、天皇先出御中院、次御八省院小安殿、中宮御職曹司、東宮御縫殿寮、次御内教坊、一品内親王同御之。…、 此間天皇遷御職曹司。 天皇自職曹司遷幸堀川院。件院、為後院。公家被造之。
	⑥⑦天元4.9.4 天元4.9.13 天元4.10.27 ⑥⑧天元5.3.11 天元5.11.17 天元5.12.25	日本紀略 日本紀略 日本紀略 小右記 日本紀略 日本紀略	立后、中宮職除目 内裏焼亡 堀川院遷御	

※ 本文中〔 〕は刊本の注釈を示す、太字・下線は筆者加筆

「殿上侍」「殿上」「殿上の間」と記載している例もみられる。『北山抄』には、清涼殿南庇について「侍所」「殿上」と表記され、依然として南庇を指す語が混在している。一方、平安時代末期に編纂された『江家次第』には、ほとんどの場面で「殿上」と表記されるようになっている。以上に見られるような儀式書における清涼殿南庇の表記方法の特徴から、『北山抄』と『江家次第』の編纂期の間に、「侍所」「殿上侍」から「殿上」(の間)へと清涼殿南庇の呼称の統一が進んでいったと推察される。

二一 二. 宇多・醍醐期における「殿上の間」の使用法

次に、各天皇期における「殿上の間」の使用法について明らかにする。宇多期には「上の侍」と「女房の侍所」に関する記録が残り、「上の侍」では御遊が行われていたという〔表-①②〕。続く醍醐期において「殿上の間」は、①儀式後の御遊〔表-④⑤⑥〕、②御覧(舞人)〔表-③〕、③儀式時の参加者(皇太子・親王を含む)の控所〔表-③⑥⑨⑩〕、④告文授受〔表-⑩〕、⑤賜祿の場〔表-③〕、および⑥儀式の場への参入経路〔表-③⑪〕として使用された。④の御遊には、宇多・醍醐期とも天皇の出御があったとみられる。出御の形態について、延長七年(九二九)二月十六日の記録〔表-⑩〕では、天皇が「侍所倚子」に御していることから、御遊等で「殿上の間」に天皇が出御する際には、倚子に着御したと考えられる。天皇が「殿上の間」の倚子に着御したという記録の初見は、延長三年九月十三日臨時奉幣儀の舞人御覧である〔表-⑬〕。なお、天皇が「侍所」に出御して(そこに常設されている)「倚子」に着御

したと明記された事例は、現在筆者が確認できている史料上では、醍醐期のみみにみられる特徴である。

その他、この時期特有の使用法として、故左大臣の子息に昇殿を承認する場〔表-⑦〕、殿上賭弓の際に女装束を懸けておく場〔表-⑨〕としての使用が確認された。また、「女房侍」(清涼殿西庇の台盤所〔図1参照〕)〔注18〕では、親王・侍臣が参加する密宴が行われている〔表-⑮〕。「殿上の間」の調度品としては、「倚子」「時簡」が史料にみえ〔表-⑬⑭⑮〕、「時簡」は宇多天皇から寛平年間に相伝されたという。

なお、延長八年六月二十六日の清涼殿南簷への落雷により、天皇は常寧殿に遷御し、譲位まで清涼殿に還御することはなかったが、その間「殿上の間」の使用に関する記録はない。

二一 三. 朱雀・村上期における「殿上の間」の使用法

朱雀天皇は在位中清涼殿に住むことはなかったが、「殿上侍」「侍」という場は天皇御在所付近に存在していたようである。また、譲位後の醍醐上皇の御在所である麗景殿にも「侍所」があった〔表-⑲〕。朱雀期の記録は少なく、即位に際して左大臣が親王公卿に酒を賜う場として「殿上侍」(おそらく弘徽殿)が使用されている〔表-⑳〕ほか、親王の紫宸殿昇殿までの一時的な控所〔表-㉓〕、儀式への参入経路(以上おそらく綾綺殿)として使用されている例〔表-㉔〕が各一例ずつみられた。また、調度品として「琴」が史料上にみえる〔表-㉔〕。

村上期の「殿上の間」は、①儀式後の御遊・給酒〔表-⑲⑳㉓㉔㉕〕、②御覧(鷹犬)〔表-㉖〕、③儀式時の参加者の控所〔表-㉗㉘㉙㉚㉛〕、④賜祿〔表-

・③④)、⑤儀式の場への参入経路[表・③]、として使用された。御記の記事が示す通り、村上天皇は在位末期においても「殿上の間」に出入りしており、特に御遊や賜飲が多くみられる。村上期の史料にみられる「殿上の間」の調度品は、「倚子」「畳」「琵琶」「琴」である[表・⑤⑧⑩⑪]。また、「古事談」という鎌倉初期の説話集に、「村上御時、朝忠卿祇候御前、舍弟朝成昇殿、候小板敷、主上御覧自小部テ、(略)」という記録もあり、村上期にすでに「小部」があり、天皇が使用していた可能性もあるが、この後世の記録をもって根拠とするには問題もあるだろう。

村上期以降の特徴として、儀式における天皇の御座として殿上御倚子を清涼殿東孫庇に設置する例がみられる(乞巧奠[表・⑩]、詩合[表・⑪])。こうした使用法は、平安末期の儀式書『江家次第』には、より多くの儀式にみられるようになる^{注 19)}。「殿上の間」(清涼殿南庇)では天皇と殿上人が同席するが、清涼殿東孫庇に天皇の座である殿上御倚子が設置される場合、侍臣の座(「殿上畳」)は東簀子敷に設置され、両者の座を置く空間が区別されている。

そして、村上期の「女房侍」は、内教坊の舞や女房歌合[表・②③]、御暦の奏[表・⑤](内裏焼亡により内侍所の代替として「女房侍」を使用)の場とされ、醍醐期に比べ儀式への使用が増加し、女官が参加する内々の宴の場として使用されている点に特色がある。天徳四年(九六〇)三月三十日の女房歌合[表・③]では、「女房侍倚子」(「殿上日記」には「大盤所御倚子」と表記される)が天皇の座とされており、村上朝のこの頃には台盤所にも常設の倚子があったことがわかる。

また、天徳四年(九六〇)九月二十三日の内裏焼亡により、天皇は職曹司に遷るが、その時期の記録に「東庇侍所」がみえる[表・⑭]。

二一四. 冷泉・円融期における「殿上の間」の使用法

在位期間(九六七―九六九)の短い冷泉天皇は、安和元年(九六八)十月五日麗景殿から改修の完了した清涼殿に遷御するが、その在位中「殿上の間」に関する記録はみられない。

続く円融期に「殿上の間」は、①告文・奏文等授受[表・⑭⑮]、②儀式の場への参入経路の場[表・⑭⑮⑯⑰⑱⑲]とされたほか、庚申御遊の際の儲儀[表・⑳]、内親王着裳儀における宰相の座の設置場所(東孫庇に座りきれなかったことによる措置)[表・㉑]、儀式時の雑務を遂行する場[表・㉒]として使用されている。「殿上の間」の調度品の記録として、「倚子」「畳」「文夾」「簡」が挙げられ[表・㉓①②③④⑤]、「(殿上御倚子)東戸」「(侍)小板敷」はこの時期のものが初見である[表・㉓]。「東戸」^{注 20)}については、天禄三年(九七二)十月二十七日の記録[表・㉓]から、大臣の清涼殿東孫庇への参入経路について、通常「殿上倚子東戸」から出入りし、官奏儀には「下戸」(右青瑣門)を使用したことがわかる^{注 21)}。このことは、『侍中』の記載と合致する。加えて、「小板敷」の存在や調度の充実など、円融朝の「殿上の間」は、『侍中』記載のそれとほぼ同様の空間となっていたようである。また、殿上御倚子を清涼殿東孫庇に移して天皇の座とする儀式形態は、村上期に続き円融期にも見られ[表・㉓]、その際に侍臣の座として東簀子敷に「殿上畳」を移し敷いている。

円融期で最も重要な特徴は、「殿上の間」への天皇の出入りが明確なカタチで確認できなくなる点である。第一に、村上期までは頻繁にみられた「殿上の間」における御遊の記録が、円融期にはみられなくなる。第二に、村上期と円融期の鷹犬御覧儀[表・㉓⑥]を比較する

と、村上天皇が「侍所」で鷹犬を観覧しているのに対し、円融天皇は「侍所」から進み出た鷹および仙華門から入り牽かれてきた犬を、清涼殿上の御簾越しに観覧している。つまり、「殿上の間」への天皇の出入りに関して村上期以前と円融期では大きく様相が異なり、円融期に至って天皇の「殿上の間」への出御が控えられるようになったと考えられる。ただし、近世復古清涼殿「殿上の間」にみられるような「小部」および「櫛形」は、同時代史料上では確認できず、天皇が「殿上の間」に出御することなく「殿上の間」をうかがいみるための装置が備えられるほどには、その使用区分は明確でなかったとみられる。

おわりに.

以上、本論では、『侍中』の記載内容と、宇多天皇期から円融天皇期にわたる記録史料を整理し、「殿上の間」の呼称、建築の形態や調度に注目して、平安宮内裏清涼殿南庇「殿上の間」の特徴とその変遷について明らかにした。要点は以下の通りである。

【『侍中群要』の「殿上の間」】

「殿上の間」は調度(特に天皇の象徴としての殿上御倚子)により、天皇との直接的な主従関係を殿上人以下使用者に意識させる空間であり、しつらいにより創出された空間秩序に基づいて作法・使用法が確立された場であった。

【宇多・醍醐期の「殿上の間」】

宇多および醍醐期には、天皇は「殿上の間」に出御し、殿上人等と御遊を行っていた。醍醐期の史料には、天皇が「殿上の間」に常設されていた「倚子」に出御して御遊を行ったと明記され、この頃既に殿上御倚子が天皇の座具として用いられていたと考えられる。

【朱雀・村上期の「殿上の間」】

朱雀天皇が在位中清涼殿に住むことはなかったが、「殿上侍」「侍」という場合は天皇御在所に存在していた。村上期は、醍醐期の特徴を引き継ぐ。天皇の「殿上の間」への出御の記録も在位末期まで確認でき、天皇が「殿上の間」に出御する際には醍醐期と同様に殿上御倚子に着席したと考えられる。また、村上期以降、殿上御倚子を清涼殿東孫庇に設置して行う儀式がみられるようになる。

【円融期の「殿上の間」】

円融期は、村上期に比べてさらなる調度の充実ぶりがうかがえ、建築装置(「殿上東戸」「小板敷」)等が初見されるなど『侍中』記載の「殿上の間」の在り方と同様の空間であったことが確認できる。また、円融期は「殿上の間」への天皇の出御が(史料上)みられなくなり、元来天皇の出御に備えて常設された殿上御倚子は、日常は象徴的機能を担う装置としてその役割を変化させていく。円融期は「殿上の間」の画期として位置付けられるだろう。

さらに、「殿上の間」の使用について言及するならば、元服前に即位した朱雀天皇と円融天皇の例をみると興味深い事実が明らかとなる。すなわち、両天皇期の「殿上の間」に関する記録は、すべて元服後にみられるのである^{注 22)}。病弱であり在位期間の短かった冷泉期に「殿上の間」に関する記録がない点も考慮すると、十分な政治的能力を有した成人天皇のもとにおいて、初めて「殿上の間」が機能したといえるのではないだろうか。

【「殿上の間」の呼称の変遷】

昇殿制が成立した宇多期以降の史料を精査した結果、天皇の御在

所殿上に設けられた殿上人の祇候場所は、天皇により「侍所」と呼ばれ、臣下には「侍所」「侍」「殿上侍」「殿上」、「藏人式」や『侍中』等の書物には主に「殿上」の呼称が用いられていたことがわかった。さらに、平安中期以降の儀式書においては、十一世紀前期までの儀式書(『西宮記』『北山抄』)には「侍所」「殿上」の語が混在するが、十一世紀末から十二世紀初頭の儀式書(『江家次第』)には「殿上」とほぼ統一して記されるようになる。以上、史料によってその変遷を辿ると、「侍」「侍所」→「殿上侍」→「殿上」→「殿上の間」という流れが想定できる。ただし、「侍所」という呼称は円融期にも用いられており、清涼殿南庇を「殿上」(の間)とする呼称の統一は、『江家次第』編纂期頃のことであると推測される。

十一世紀以降の「殿上の間」の変遷については今後の課題であるが、通常は主人が着座することのない貴族住宅の侍所、武家棟梁と配下武士が一同に会する場である鎌倉將軍御所の長大な侍所の原点に、平安宮内裏清涼殿南庇「殿上の間」(天皇御所「侍所」)が存在するであろうことは、筆を置くにあたり本論で主張しておきたい点である。

注

注 1)古瀬奈津子「昇殿制の成立」(『日本古代王権と儀式』吉川弘文館、一九九八年)。そのなかで、「昇殿制の展開で注目される第一点は、清涼殿に「殿上の間」が設けられたこと」「第二点は、前述の「殿上の間」に「日給の簡」が設けられて、四位・五位の殿上人(藏人を含む)の姓名が登録され、上日が記録されるようになったこと」と述べられているが、実際の事例をもとに昇殿の場として論じられているのは、平安時代中期以降の清涼殿「殿上の間」についてではなく、平安時代初期の「殿上」についてである。

注 2)島田武彦『清涼殿の御装飾』(内外出版印刷、一九三八年)、同『近世復古清涼殿の研究』(思文閣出版、一九八七年)

注 3)本論は、財団法人神道大系編纂会『続神道大系朝儀祭祀編 侍中群要』(神道大系編纂会、一九九八年)、目崎徳衛校訂・解説『侍中群要』(吉川弘文館、一九八五年)に依拠する。

注 4)主な参照史料は以下の通りである。国書刊行会『続々群書類従』第五巻記録部 三代御記(続群書類従完成会、一九六九年)および所功編『古代史料叢書』第三輯 三代御記逸文集成(国書刊行会、一九八二年)、東京大学史料編纂所『大日本古記録 貞信公記』(岩波書店、一九五六年)、米田雄介・吉岡真之校訂『史料纂集 史部王記』(続群書類従完成会、一九七四年)、東京大学史料編纂所『大日本古記録 九暦』(岩波書店、一九五八年)、黒板勝美『新訂増補国史大系第二十八巻 政事要略』(吉川弘文館、二〇〇〇年)。

注 5)平安時代中期以降の儀式書(私撰)として、十世紀成立の『西宮記』、十一世紀前半成立の『北山抄』、十一世紀末から十二世紀初頭成立の『江家次第』を扱う。神道体系編纂会『神道体系朝儀祭祀編二 西宮記』(神道体系編纂会、一九九三年)、神道体系編纂会『神道体系朝儀祭祀編三 北山抄』(神道体系編纂会、一九九二年)、神道体系編纂会『神道体系朝儀祭祀編四 江家次第』(神道体系編纂会、一九九一年)。

注 6)目崎徳衛校訂・解説『侍中群要』(吉川弘文館、一九八五年)。

注 7)江戸時代の有職故実家である裏松固禪(光世)著。三十巻。一七八八年成立。当時収集し得た史料に基づいて大内裏の位置・規模・構造・沿革などを考証したものである。現在も平安京の都城研究、殿舎に関する研究の基本書とされている。本論は、故実叢書編集部『新訂増補故実叢書 大内裏図考證』第一・第二(明治図書出版、一九五二年)に依拠する。なお、『大内裏図考證』は『侍中群要』を参照していない。

注 8)『侍中』「小大盤親王・大臣料也。次大盤二脚、大納言以下、六位以上料也。而近代公卿被候殿上之時、不謂上下騰、必以下盤居小大盤。如何。大納言以下被候之時、猶可居中大盤也。親王・大臣之時、可居所大盤也。如此之事、且又可隨便宜。」

注 9)日本中世史の立場から殿上御倚子の象徴性について言及されている研究

として、保立道久「殿上の間の椅子と小葩」(小泉和子 玉井哲雄 黒田日出男編『絵巻物の建築を読む』、東京大学出版会、一九九六年)、美川圭『院政の研究』(臨川書店、一九九六年)等がある。

注 10)『侍中』「敷砂事(南殿ハ南階左右相分敷之)ノ暫垂庇御簾、敷了上之、御前庭中(以南右衛門府敷之、以北左衛門府敷之)、毎有可然事、仰彼令敷之。上格子以前敷之、殿上前同鋪之」

注 11)『侍中』「凡御所無立書爲勅使参東宮之人、雖非彼官侍臣可昇殿上(但近代之事可隨宜、又可隨時定並形勢)。院殿上不可昇。院御使昇内殿上云々。一条院御東宮時、円融院御使皆昇殿上云々。踐祚之後之例可尋之(或人云、一条院御時、爲円融院御使参入、候小坂敷。出羽前司季信之説也。或著殿上孟酌事、貫首対座云々。是非隨説)」

注 12)宣旨下書きは、大臣には殿上・陣で、納言には陣腋・弓場で下す。宣旨は、納言には陣腋・弓場で立ちながら下しても問題ないとされている。

注 13)内侍は儀式において主要な参加者に昇殿を促す役目を担う。紫宸殿儀では、「東檻」(紫宸殿東南階上)に臨む(立つ)が、清涼殿儀では、「殿上東戸下」に臨む。そのことは、「東檻」と「殿上東戸下」が昇殿口として同様の性質を持った空間であることを示している。

注 14)『西宮記』では、「清涼殿侍所」を、「清涼殿御前座」「宜陽殿座」とともに「公卿本座」としている。『大内裏図考證』「殿上」の項冒頭では、「殿上」(の間)が「侍」「殿上侍」「侍所」「上侍」「雲上」「雲路」とも呼ばれていたことに触れている。清涼殿南庇を侍所と呼んだことは一般的には知られておらず、『国語大辞典』には「平安時代、院・親王・摂関家などで、その家の事務をつかさどった所。また、その侍の詰所」と説明されている。

注 15)前掲古瀬氏論文(注 1)

注 16)藏人の職務・職務規律に関する式。現在は散逸し逸文のみ残存する。少なくとも寛平二年(八九〇)撰述の式(「寛平小式」)と天曆年間の式(「天曆藏人式」)の二種類ある。逸文は『侍中』に多く引用され、藏人の奉仕する諸儀式の作法等を行事の次第により記載したものであったという。諸儀式の執行に際し、廷臣の間で参考にされた。

注 17)該当箇所について、「天曆藏人式」式文そのものの引用はないが、それに準拠したものであろうとの渡辺直彦氏の指摘がある(同『日本古代官位制度の基礎的研究 増補版』(吉川弘文館、一九七八年))。

注 18)清涼殿西庇の「台盤所」の別称である。「殿上の間」が殿上人の祇候場所とされていたのに対し、「台盤所」は、天皇の生活空間である西庇に設置され、天皇に奉仕する女官の祇候場所であった。天皇の倚子・女房の簡(袋有)・朱塗の辛櫃・御膳棚・火櫃・囲基彈某等が備えられた空間であり、南庇の「殿上の間」と多くの共通性を持つ鋪設の形態がとられている。「女房侍」における儀式は女性参加者を含む饗宴が多く、天皇が着御する倚子のある「女房侍」を中心に、「女房侍」に接続されている中渡殿、朝餉および台盤所壺、後涼殿の東の空間が儀式の場として使用された。おそらく、清涼殿西側を儀式の場とする使用形態は、平安中期における御在所の清涼殿への移行に伴って、清涼殿の儀式として確立されたと考えられる。

注 19)『江家次第』記載の内裏における儀式参加者の座については、別稿にて詳述している(満田さおり「仁寿殿・紫宸殿・清涼殿の空間構成と儀式ー平安宮内裏の空間構成と儀式に関する歴史的研究 1ー」(日本建築学会計画系論文集 vol73No.634、二〇〇八年)、同「平安宮内裏の空間構成と儀式に関する歴史的研究」(修士論文、二〇〇九年)、同『「江家次第」にみる仁寿殿・紫宸殿・清涼殿の儀式の座の設置方法」(研究代表者: 川本重雄『アジアの宮殿建築と儀式』(平成十九年度科学研究費補助金(基礎研究 B)研究成果報告書第6章として所収、二〇一〇年))。

注 20)殿上東戸は主に公卿をはじめとする儀式の主要参加者、右青瑣門は出居の参入や儀式の中心となる物(位記の筥・御盆物の長櫃)を運び込む際に使用され、仙華門は主に殿上人・僧侶・相摸人の参入場所として使用されている。

注 21)官奏は、大臣のみが参加し、太政官代表として天皇に文書を奏上する儀式である。本来通常の儀式で殿上東戸から参入する大臣が右青瑣門から参入する点が注目され、おそらく官奏では大臣が、叙位等における位記の筥を捧げ持つ納言と同じ役割を担うため、この門から例外的に参入したと考えられる。

注 22)朱雀天皇の元服儀は承平七年(九三八)正月四日、円融天皇の元服儀は天禄三年(九七二)正月三日である。

(2012年6月10日原稿受理、2012年9月18日採用決定)